

經濟論叢

第158卷 第1号

哀 辞

故 浅沼万里教授遺影

- | | | |
|------------------------------|---------|----|
| 基軸通貨国ビナイン・ネグレクト論の系譜……本 | 山 美 彦 | 1 |
| 近世農村舞台の生成と発展…… | 後 藤 和 子 | 16 |
| 中国華南地域における
金融機関の勃興とその性格…… | 姚 国 利 | 34 |
| ベンチャー企業の研究開発支出の決定要因…… | 蘇 顯 揚 | 54 |
| 芸術支援政策の財政問題(2)…… | 金 武 創 | 77 |

記 事

浅沼教授逝く

追悼講演(赤岡 功・青木昌彦・瀬地山敏)

追 悼 談(熊沢 誠・菊谷達弥・三田栄治)

故 浅沼万里教授略歴・著作目録

平成8年7月

京 都 大 学 經 濟 學 會

記事

浅沼教授 逝く

浅沼萬里教授は、平成8年3月23日午後9時57分、胃癌のため逝去されました。享年60歳。

浅沼教授は、昭和36年京都大学経済学部を卒業、引き続き同大学院で学ばれた後、同経済学部助手、助教授を経て昭和59年教授に就任、同63年から平成2年まで評議員、同5年から7年3月まで経済学部長を務められ、本学の管理運営に多大の貢献をされました。

教授は、徹底した実証主義に立脚し、国内外での詳細な聞き取り調査に基づき、企業組織及び企業間取引の制度上の仕組みを解明されてきました。また、理論研究の面においても、自らの実証研究の成果に依拠して、取引費用の経済学や契約理論等の理論枠組の拡張に努められてきました。とりわけ、自動車産業のメーカーとサプライヤーの関係についての一連の研究は、その独創性と厳密性において、国際的にも高く評価されているものです。

また、教授は、学部及び大学院学生の教育・研究指導にも熱心に取り組み、多くの優れた後進を育成されてきました。

終始、研究と教育、学部の発展のために情熱を燃やされ、学問の発展に大きく貢献されました教授を、いま失いましたことは経済学部にとりましても、誠に痛恨の極みであります。

なお、教授は、3月23日正四位に叙せられ、勲三等旭日中綬章を授与されました。

浅沼家では、3月26日、日本キリスト教団京都教会で、キリスト教式で葬儀・告別式がおこなわれ、経済学部においては、4月22日、教授の人柄と学問的業績をしのび、下記のとおり、京都大学経済学部葬をおこないました。

学部葬は、午後2時、菊池光造経済学部長の挨拶で始まり、黙禱ののち、各方面より弔辞、追悼講演、追悼談を承り、御遺族を代表して浅沼光太郎氏の御挨拶をいただきましたのち、参列者全員が霊前に献花して、午後4時半、とどこおりなく閉会しました。

当日、学内外から多数の御参列をいただき、厳肅なうちに学部葬をおこなうことができましたのは、御遺族、弔辞、追悼講演、追悼談、弔電をいただきました諸先生、諸先

聲をはじめ、参加者一同の御厚情の賜ものであり、深く感謝する次第であります。
次に、当日の、弔辞、追悼講演、追悼談を収録いたします。

故 浅沼万里教授追悼会

京都大学経済学部葬

平成8年4月22日(月) 午後2時～4時半
京都大学法経第七教室

式 次 第

- | | | |
|----|----------------|----------------------|
| 1 | 開 会 | |
| 2 | 京都大学経済学部長挨拶 | 菊 池 光 造 殿 |
| 3 | 黙 禱 | |
| 4 | 弔 辞 | |
| | 京都大学総長 | 井 村 裕 夫 殿 |
| | 京都大学名誉教授 | 山 田 浩 之 殿 |
| | スタンフォード大学教授 | 今 井 賢 一 殿 |
| | 大学院浅沼ゼミナール学生 | 馬 駿 殿 |
| | 京都大学経済研究所教授 | 有 賀 健 殿 |
| | 京都大学経済学部同窓会長 | 鳥 井 道 夫 殿 |
| 5 | 弔電披露 | |
| 6 | 追悼講演 | |
| | 故浅沼教授の略歴と業績 | 京都大学経済学部教授 赤 岡 功 殿 |
| | 故浅沼教授の学問を振り返って | |
| | スタンフォード大学教授 | 青 木 昌 彦 殿 |
| | 故浅沼教授の人柄を偲ぶ | 京都大学経済学部教授 瀬 地 山 敏 殿 |
| 7 | 追 悼 談 | |
| | 友人代表 | 中南大学教授 熊 沢 誠 殿 |
| | 演習卒業生代表 | 京都産業大学助教授 菊 谷 達 弥 殿 |
| | 演習学生代表 | 三 田 栄 治 殿 |
| 8 | 遺族挨拶 | 浅 沼 光 太 郎 殿 |
| 9 | 献 花 | |
| 10 | 閉 会 | |

主催 京都大学経済学部

挨拶

本日は経済学部教授故浅沼万里教授経済学部葬に当りまして、皆様ご多忙中のところをこの場にお運びいただきありがとうございます。

会を始めるにあたりまして一言ご挨拶を申し上げたいと存じます。浅沼万里教授は、さる3月23日午後9時57分に逝去されました。皆様ご存知のとおり浅沼万里教授は、昨年の3月まで2期、2年にわたり経済学部長をお務めでした。任期満了で退任されました。その後5月の頃から身体の不調を訴えられました。最初御本人は肝臓を心配しておられたのですが、検査をされまして肝臓の方は何ごともないということで私も含めまして周囲の者も安堵いたしましたわけですが、念の為にと言うことで検査をされたところ、胃の上部に異変があるということがわかりまして7月の初めに入院、そして手術を受けられました。手術の後、回復は順調のように見受けられまして、大変お痩せにはなったのですが、秋からは教育研究のお仕事に復帰されました。ご存知のとおり浅沼万里教授は、非常に誠実で責任感の強い方でありましたので、秋以降この2月に至るまで教育研究に本当に全力を投入されました。

私は役目の上からも、どうか御病気のあとにご無理をなさらないようにと再三申し上げたわけなのですが、浅沼万里教授のその様な形での仕事への打ち込み方は今考えますと病気の再発或いはお命を縮めることになったのではないかと悔やまれます。何れにしましても2月末に再度入院をされまして、急速に体力を失われたわけですが、一方で最後まで浅沼さんは病氣と戦うという強い意志を示されました。私もしばしば病院にお見舞いしましたが、浅沼さんはいつも自分のこれからの研究の問題、経済学部のこれからのこと、将来のことについて語り続けておられました。ちょうど亡くなる4日前でしたか、病室にお見舞いしたおりに、浅沼さんは精神的に強い方でありましたから一言も弱音を吐いたりされませんでした。むしろ自分の方から、これからの経済学部が如何にあるべきかを話し始められまして、二人でかなり長時間にわたってそのような話を続けた記憶がございます。

浅沼さんはこのようにして亡くなられましたが、考えてみますとこの学部で学生として入られ、大学院、そして教授としての最後の時までおよそ40年にわたってこの経済学部と共に歩みをすすめられたわけです。今浅沼さんに亡くなられてみますと、私どもいろいろな形で浅沼さんの生前の恩恵を受けたと思います。私事を述べることをお許しい

ただけるなら、私は昭和37年浅沼さんと同時に京都大学経済学部に入學いたしました。それ以来40年いろいろな場面で彼と苦勞を共にいたしました。そして事の處理にあたりましてときに意見を異にしたこともございましたが、この40年間互いに信じあう友として歩んでまいりました。私自身にとりまして、そのようなかけがえのない友を失うということになりました。

浅沼さんの業績や學問については後程お話もあると思いますので、ここでは浅沼さんの経済学部への貢獻について触れさせていただきます。浅沼さんは経済学部に入學し、大学院を経て直接に経済学部のスタッフとして職を奉じられたという意味では最後の世代といえると思います。つまりその後のスタッフは、同時期の私も含めてですがほぼ大学院を修了後は外にでる。その後にもどってくる方もおられますが、ほぼそのような経路をとられますので、全くの生え抜きというのは、おそらくこの学部では浅沼さんが最後ではないかと思います。それだけに浅沼さんは、責任感の強い方でもありましてスタッフになられた助教授時代から経済学部の教職員の支柱としての役割を担われたと言えると思います。振り返って見ますと大学紛争の時期、とりわけ経済学部はもっとも厳しい形で大学紛争に直面したわけですが、その解決のために浅沼さんは本当に人知れぬ努力を重ねられましたし、紛争後の経済学部の再建のために骨身を削って尽力されました。また近くは評議員、学部長としての重責を担われたわけでございます。とりわけこの数年は全国的に進行します大学改革の流れの中で、当学部も大学院重点化を課題として取り組むことになりましたが、その際に浅沼さんは学部長の任にあって本当に血の滲むような努力をされました。例えば、大学院重点化構想の本格的な確立、京都大学経済研究所との協力関係を揺るぎ無いものに完成させる。或いは、大学院人試制度の改革、増えてくる留学生を含めた学位取得プログラムの体系化、経済学部自己点検評価の実施等々、教養に暇ないぐらいに学部・大学院の改革の努力を重ねられました。ある意味ではこれからの経済学部の歩む方向の礎石を、全て据えられたといっても良いかと思えます。残念ながら浅沼さん任中に、大学院重点化のゴールまで到達することはできなかったのですが、ようやく平成8年度この4月から、大学院4専攻のうち2専攻が重点化されました。引き続き私どもは、学部改革を行って研究科の再構成と完成を目指すということになりますが、これも考えてみますと全て浅沼さんが心血を注いで敷かれたレールの上を、私どもが走ることになるわけでございます。その意味では、最後まで浅沼さんは京都大学経済学部のために身命をかけてお尽しになりました。私どもも、経済

学部として、浅沼さんの大きな貢献を決して忘れることはないという思いを込めまして、この経済学部葬を営むことになったわけでございます。

春まだ浅い日に浅沼教授はお亡くなりになりました。享年60才、これは今の時代からしますとあまりにも早いご逝去であったと思っております。しかし、浅沼さんが学問の分野で、そして経済学部のために残された足跡というのは非常に大きなものでありまして、本日は浅沼さんの学問、人柄を偲びつつ皆様とともに謹んで哀悼の意を表したいと思っております。拙い言葉を連ねましたが、式のはじめにあたりまして私のご挨拶にかえさせていただきます。

平成8年4月22日

京都大学経済学部長 菊池光造

弔 辞

京都大学経済学部教授 浅沼萬里博士のご逝去の報に接し、京都大学を代表して心から哀悼の意を表します。

故浅沼教授は、昭和36年本学経済学部を卒業され、同40年経済学部助手、43年助教授、59年教授に就任され、31年にわたり本学において研究・教育に努めてこられました。平成5年4月から7年3月までは、経済学部長、大学院経済学研究科長として、学部、研究科運営の重責を担い、大学院重点化と学部の研究・教育の改善のため、身を削ってご尽力下さいました。

浅沼教授は、いつも未来を見つめ、新しい理論、方法を開拓しようとする、創造的な知性の持ち主でありました。教授は、経営学、組織論、理論経済学にまたがる「企業組織の経済分析」という分野で画期的な業績を挙げられました。特に、日本の企業組織と系列関係について、企業の制度的特徴とデータの綿密な実証分析と理論研究を行い、日本企業の長期取引関係の合理性、普遍性を評価する独創的な研究成果を発表されました。こうして教授は、日本企業の分析を通じて世界の経営学、経済学の革新に大きな貢献をされ、世界の多くの研究者から注目されることになりました。

また、浅沼教授は、大学全体の運営に際しても、評議員、将来構想検討委員会委員、学生部委員、図書館商議会商議員等の要職を歴任され、渾身の力を注いで事に当たられました。国際交流委員会委員としても、昭和60年からご逝去まで、8年あまりの間、国

際交流の発展のため、献身的にご努力いただきました。特に、平成2年9月から5年6月までは、同委員会副委員長として、トロント大学、オックスフォード大学、ブラウン大学との交流協定締結に大きな役割を果たされました。京都大学を世界に紹介する、英文一覽編集委員長としても、平成元年から4年間、英文一覽第7版、第8版の作成のため、労苦をいとわず力を貸して下さいました。

このように、浅沼教授は、社会と学問の新しい課題に対応し、発展の飛躍台に立つ京都大学にとって、創造的な研究の前進と国際交流の充実という両面から、全精神を傾け、情熱を注いでリードして下さい、かけがえのない方でありました。

去る3月23日深夜、浅沼教授が突然お亡くなりになったとお知らせをいただいたとき、私は強い衝撃を受け、呆然といたしました。研究・教育の歩みの半ばにして、しかも、これからの研究計画をお立てになっていた最中の、あまりにも早すぎのご逝去でありました。まさに痛恨の極みであります。

思い返しますと、つい1年前までご一緒した部局長会議では、浅沼教授、あなたはいつも私のすぐ前に座っておいでになりました。そして、温厚で静かな語りかたで、将来を見通す構想力と緻密な思考に立脚して、諄々と自らの意見をお述べになりました。私はあなたのお話から京都大学の発展にあるべき方向について、多くの示唆をいただいたものでした。いま、あなたがもう此の世におられず、もう永遠にお話しすることもできないと思いますと、悲しみが込み上げてまいります。

浅沼教授。私達は、あなたの、未来を見つめて止まなかった創造的な知性と、日本の分析から世界に対して発信する国際的視野を受け継ぎ、21世紀に向けて、京都大学をさらに大きく前進、発展させるよう、全力を尽くしたいと思います。

どうぞ、安らかにお眠り下さい。

平成8年4月22日

京都大学総長 井村裕夫

弔 辞

浅沼萬里さん

ロンドンであなたの訃報に接し、驚愕いたしました。昨年夏の入院手術のときもたいへん驚きましたが、退院後のあなたの元気な声をきき、すっかり安心しておりました。

ロンドンから帰った後、あなたの京大定年後のことについて或る提案をもって何おうと思っていた矢先でした。約35年にわたる親しい友人関係を急に断ち切れ、今、私は深い悲しみととまどいと何ともいいようのない寂しさを覚えています。

あなたと親しくなったのは、昭和36年にあなたが大学院に入って私達の研究会に参加された時からです。あなたは経営学の研究を目ざして学問の道に入られました。私達は当時の先端的な経済学の理論の学習に切磋琢磨いたしました。あなたは緻密で粘り強い思考力と鋭い問題意識の持主でした。経済学の理論を経営学に適用するという一貫した研究態度で、一步一步新しい地平を切り拓き、浅沼経営学を確立してゆかれました。

とくに、オリバー・ウィリアムソンの「取引費用の経済学」を自家筆箋のものとして行われた、日本型経営の研究は、従来の研究水準をはるかに越えるものとして世界の注目を浴びる輝しい業績となりました。浅沼さんの死は日本の学界にとってまことに大きな不幸であります。あなたが京都大学経済学部の同僚となられてからは、私たちは友人という以上に同志として固く結ばれるようになりました。

学園紛争の時も、私が経済学部長の時も、あなたは大きな流れをつかみつつ細部まで配慮の行き届いた方針を打ち出して私に助言し、激励して下さいました。そして私の定年退官のときには、学部長として私を送って下さいました。そのあなたが帰らぬ人となってしまったことは、まことに残念です。

しかし、あなたの思い出は今後永く私たちの胸の中で生きつづけるでしょう。そして、あなたの業績はいつまでも光芒を発しつづけるでしょう。浅沼さん、どうか安らかにお眠り下さい。

平成8年4月22日

京大名誉教授 山田 浩之

弔 辞

浅沼万里さん

まことに残念です。無念としか言いようがありません。重厚で落ち着いた雰囲気を持つあなたが私より年下とは日頃感じておりませんでした。私より4歳以上も若いあなたがいま人生を閉じるのはあまりにも早すぎます。しかし、あなたの学者、研究者としてのこれまでの人生は、まことに立派なものでした。年輪を重ねるにつれて光り輝いて

いました。それだけに、あなたの早世が悔やまれてなりません。

浅沼さん、あなたと私とは学者として多分に同じような環境にいたように思います。経営学と経済学という2つの分野にかかわり、両者のバランスに苦労しながらどちらかといえば経済学に軸足をおいて、企業の内と外を分析しようと共に歩んできたともいうべきでしょうか。

やや寡黙なあなたはそういうことをかくべつ話されたわけではありませんが、時折の短い会話によってお互い抱えている問題は理解しあっていたように感じています。もう20年近くも前になりますが「内部組織の経済学」というような領域にはほぼ同時に注目し、そこで一緒に若干の仕事をしたり、また日本の企業・産業組織の特徴を外国の研究者に理解可能なかたちで実証的に解明しようとする努力の過程で、私はあなたの仕事に大いに励まされてきました。

あなたの仕事ぶりは、満州に生まれ「万里の長城」に因んでつけられたといわれるあなたの名前を体現するかのようになり、まさに長城の礎石を「万里」に積み重ねてゆくような着実なものであり、私にはとても真似のできないものでした。その積み重ねのなかから幾つかの論文の花が咲きそれが世界の一流の学者から評価されたとき、私は同じ環境にいたものとして多少の嫉妬とともに、これで世界の学界に対して日本の企業産業組織を正当に説明するというわれわれの義務を果たす道が開かれたと安堵したことを、いま鮮明に思い出します。

浅沼さん、そのあなたの仕事が京都大学の経済学部長という激職のために中断されかけたとき、私はなんとも表現し難い不安に陥らざるをえませんでした。あなたが学部長に選ばれ、それを引き受けざるをえなかったのは当然で止むをえないことです。しかし浅沼さん、あなたのように誠実で頼りがいがあり、そして愚痴をいわない人に大学という組織は多くの仕事を押しつけがちなのです。案の定、あなたが執筆していた書物、1年前すでに6、7割は出来た原稿を私に見せてくれたその著作の仕事は、完全に中断されてしまったようです。学部長職などにつけば、それも止むをえないことだったのかも知れません。しかし、ちょうどその時は、まさに日本の経済システムが大きな変革を迫られ、あなたの分析の対象としていた企業、産業の実態が、がらりと変わっている時期でした。現実を丹念に調べるあなたの研究方法からすれば、この時期に研究を中断せざるをえなかったことは、断腸の思いだったにちがいません。

私の経験からしても、その辛さは想像がつきます。それだけに、その激務とジレンマ

から解放されたとき、あなたはほんとうにホッとされたのだと思います。そのわずかの隙に癌細胞という悪魔が狙いをつけたのではないのでしょうか。その悪魔が、あなたの万里の長城構築をついに未完のものとしてしまったのです。

無念というほかありません。

•しかし、あなたは最後まで書物を完成しようという意志を失いませんでした。あなたの義兄にあたる中岡哲郎教授によれば、あなたは病の回復期にも原稿を書き進め、最終章だけが書けないのをとても苦にされていたとのこと。あなたの死の数日前、その最終章の構想をなんとか聞きだそうとした中岡教授は、涙ながらにあなたの思いを語ってくれました。ここであえて内容には立ち入りませんが、あなたが最終章に何を書かねばならぬと考えていたかは、私には良くわかるような気がします。

しかし浅沼さん、あなたの志、あなたの問題、あなたの研究プランは誰かが引き継いでゆくはず。それがあなたがみずから選んだ学者、研究者という仕事の良いところだと思います。あなたの未完の最終章に代わるものはやがて誰かが書くはず。私が京都に来て学んだ好きな言葉に「西田を知ることは彼と同型の問題を抱いて生きることである」というのがあります。いうまでもなく、ここで西田というのは京都大学のあなたの大先輩、西田幾太郎氏のこと。私も僭越ながら、あなたの志したところを学び、あなたと同型の問題を抱いて生きてゆきたいと考えています。

これをもってお別れの言葉とします。どうか安らかに眠り下さい。

平成8年4月22日

スタンフォード大学教授 今井賢一

弔 辞

先生、先生、浅沼先生

何度、お呼びしても、もう先生からお返事をいただけないと思いますと、私どもの胸は今にもはりさけてしまいそうであります。

「先生、論文のコメントをお願いします」、「先生、推薦状をお願いします」、1月17日のゼミの終わりに、既に悪魔のような病が先生のお体を蝕んでいることを全く知らない私どもは列に並んで先生にこうお願いしますと、先生はいつものように丁寧に1人1人に対応して下さいました。今思えば、この時が先生の大学院での最後のゼミになって

しまいました。この全ての終わりを、誰が想像したであらう。新学期のゼミを待っております私どもは、突然、あのお声を聞くことも、あのお顔を拝することもできなくなりました。なんとしたことであらう。私どもは涙もでないほどであります。

先生、先生はゼミの時、常に、組織経済理論の最新の研究を取り上げ、論文の背景から、経済現象の解明に対する貢献まで厳密に、かつ分かりやすく私どもに教えてくださいました。そして、私どもの論文についても、常に、論文の構成から言葉の使い方まで、丁寧に、かつ厳格に指導してくださいました。私が別の論文に引用された論文をきちんと読まずに引用したところ、先生は「良心のない研究者になるな」と叱咤激励されました。それ以来、私はこの言葉を一生の座右の銘としております。

しかし、先生はご本人の論文についての私どもの未熟な意見に対して、検挙に耳を傾けてください、どんなつまらない問題についても真剣に考えてくださいました。そして、先生はいつも、私どもの生活にも大変気を配って下さいました。私どもが奨学金の推薦状をお願いします時、先生はどんなに忙しくても、熱心に書いて下さいました。先生、先生が私の修士論文の最終チェックをして下さったあの日のことを私は一生忘れません。あの日、先生は朝から晩まで1食もなさらずに私の論文を一言一句、丁寧にチェックしてくださいました。

中国語には、「嚴師慈父」という学問に厳しく、生徒に優しい先生のことを意味する言葉があります。この言葉はまさしく私どもの先生の為にある言葉であります。

私どもはもう先生のご指導をうけることができません。しかし、先生が私どもに教えてくださったことは、いつまでも私どもの人生を導いておいでになります。

先生、長い間、お教え、お導きを受けました私どもは、先生のご恩に報いられるはずのないことはよくよく心得ております。しかし、私どもは世界のどこにいても、先生のご指導を忘れません。私どもの心には、先生のお姿はきわめて気高く、いつまでも鮮やかに残っています。私どもは浅沼ゼミの名に恥じない人生を送ることを固く誓います。先生、どうぞ天国で永く私どもをおまもりください。

先生、静かに、静かに私どもと別れておいでになりました先生、長い間、たいへんお世話になりました。有り難うございました。

平成8年4月22日

大学院生（浅沼ゼミナール） 馬 駿

弔 辞

浅沼先生のもとで学んだ数多くのゼミ生の1人として弔辞を申し上げます。浅沼先生が逝かれて早や1ヶ月近く経ちます。昨年夏に入院・手術をされ、その後大学院の会議でお見かけしたり、それ以外にも様々な機会におめにかかり、やはり随分やせられて、復調なさるのには、暫く時間がかかるなあ、と思っておりました。そのような私にとっても、浅沼先生の死はあまりにも唐突で、いまでも、お亡くなりになったという実感がありません。ましてや、今は京大から離れた地で生活する大多数のゼミ同窓生にとっては、先生の死は唐突なばかりか、理不尽で信じがたい悲しい知らせであったと思います。

4半世紀も昔のことになる、私がゼミ生であった頃の浅沼ゼミの風景を思い起こしますと、先生はとても物静かで沈着冷静なお人柄で、授業においても、一歩一歩、論理と思考の道筋を学生達に根気強く説明されるのが常でありました。先生はこの10年間以上にわたり、企業組織や企業間取引といった、企業経営のミクロ分析に取り組み、重要な業績を残されたのは皆様ご存知のとおりです。私が学生であったころは、学生にはあくまで標準的なミクロ経済学の分析の重要性を説かれておられました。先生はまだ3代なかば、気鋭の理論家として、ミクロ経済学理論の深化と発展に深く関わりあう研究をなさっておいででした。その当時は、まだ xerox コピーが高価なため、青焼きのコピー用原紙に、手書きの report を書き、発表に備えたのを懐かしく思い出します。先生の授業に出席してから、20年以上たちます。私には、先生が声を荒げられた記憶さえありませんが、ゼミでは、学生が自ら姿勢を正し、日頃はさぼっていても、発表に備える時は必死になるような、心地よい厳しさを先生はお持ちでした。

私が3年生であった年に、先生は Harvard 大学に留学されましたが、その留学や、青木先生とのご交流、さらには Williamson 教授との出会いを通じて、企業組織と企業間関係の分析という大きな研究課題にたどり着かれたのだと思います。先生のご研究の変化と発展は、70年代から今日にいたる、ミクロ経済学の大きな前進と軌を一にしたもので、先生の教えられる授業やゼミもその足跡をたどっていったのだと想像します。先生のご研究はそうように発展し、深まりましたが、物静かで真摯なお人柄と学生への接し方は、恐らく終生お変わりがなかったのであろうと信じます。

学問に王道なしとは、まことに真実をついた警句であります。先生は正しくその警句通りに、王道を探すのではなく、正々堂々と長く果てしない研究の道を歩まれました。

我々もそうありたいと思います。浅沼先生は我々の思い出のなかにいらっしやる以上に、我々の研究のいしづえとして、重要な先行研究として生き続けるのでしょう。先生は、ご存知のように、長いご研究の集大成となる著作の完成を目前に亡くなられました。さぞかし無念で、悔しい思いで闘病生活を送られたことなのでしょう。幸いにも、多くのご友人のご協力で、ご遺稿も出版される予定と伺っております。しかし、先生はきっと遺稿となる著作を超えて、更に大きな研究課題に胸ふくらませ、計画を構想されていたような気がします。先生はそのお人柄から、決して、そのようなことを私にお話されたことはありませんでしたが、お名前のように、万里をめぐる、壮大な研究計画を心密かにお持ちだったのではないのでしょうか？先生に学んだものでありながら、そのようなお話を伺う機会をとうとう逃してしまったことが何よりも残念でなりません。私もそのような夢を持ちたいと思います。先生が、この次の研究、そしてそのまた次の研究へ向かう糧として、お持ちであったに違いない大きな夢を。

先生、長い間有り難うございました。そして、本当にお疲れ様でした。安らかにお休み下さい。

平成8年4月22日

京都大学経済研究所教授 有賀 健

弔 辞

謹んで京都大学経済学部、故浅沼万里教授のご霊前に、経済学部同窓生を代表し、哀悼の言葉を捧げます。

本学部同窓会が、会員相互の絆を強めつつ有るとき、本会発展のため多人のご尽力をいただいた、浅沼先生のご逝去の報に接し、同窓生一同まことに悲しく残念の極みであります。

思えば京大経済学部縁のある者が、相互の親睦、交流を強めようという気運が盛り上がったのは、京大経済学部70周年を迎えた頃でした。そのため同窓会運営に不可欠な、1人1人の消息を尋ね、まとめていく、繁雑な同窓会名簿づくりが始まりました。浅沼先生は事務局とともに献身的にご協力下さり、名簿は先生が同窓会理事長時代にほぼ完成、晴れて陽の目を見ました。

今日各地で活発に同窓会が開かれ、和やかに交歓が行われているのも、ひとえに浅沼

先生のご貢献と情熱に負うところまことに大きいものがあります。先生は学部長の要職にあられ、日々ご多忙にも拘わらず、誠実なお人柄どおり、各地で開かれる総会にいつも心を配っておられました。とりわけ印象深いのは、私自身真只中で被災したあの阪神大震災の翌日、大阪支部総会に集まられたメンバーのために、おして講演をされたことでした。そこに浅沼先生のご人格と、同窓会への深い愛情を感じずにはおられません。

数々のご業績をあげておられる学問分野で、先生が常に実証的な方法でご研究に取り組んでこられたことに、私は大きな感銘と共感を覚えます。1人の企業経営者として、また日本マーケティング協会の会長を務める身として、私は、経済学、経営学は実際の経済や産業に即した実学であるべきだ、と常々考えて参りました。

それだけに先生のご業績を振り返るとき「自動車産業の部品取引の構造」「メーカーとサプライヤーの関係」など、象牙の塔に閉じこもることなく、実証的な研究手法に重きをおかれた先生の学問的姿勢に、心から敬服するものであります。先生のご業績が国内外で高く評価されるのは、誠に由ある事でありましょう。

グローバル時代の今日、日本の進路、企業に求められるものは、創造的な思索、独創的な研究であり、より高度な専門知識をもった人材の育成です。こうした要請に応え、経済学部では、学部長時代の浅沼先生が推進役となり、論文入試の実施、現代経済学専攻の設置、さらに大学院大学への改革など、将来を見据えた自己変革努力を熱心に行ってこられました。長い歴史と輝かしい伝統をもつ学部の改革は、決して容易なものではないでしょうが、新たな飛翔への先頭に立たれた浅沼先生の勇気と決断に、同窓生として惜しみない支援の拍手を贈り、改めて敬意を表するものであります。

私事になりますが、浅沼先生のこの報告書に、昭和18年の「京都帝国大学経済学部授業時間表」があります。その年12月は、私もあの学徒動員の1人として出陣した時です。時間表に高田先生、堀江先生、汐見先生など懐かしいお名前を発見した時、暗い時代ではあったが紛れもない我が青春の時代であったことを彷彿として思い起こしました。当時の学生にとって、かけがえのない貴重な資料を先生は残してくださいました。

浅沼先生の国際的なスケールのご研究と優秀な後学育成のご功績、さらに志半ばでありましょうが、経済学部改革へ歩みだされた偉大なご足跡は、いつまでも学部の歴史に残ることでありましょう。先生が母校と卒業生を固く結んでくださった数々のご貢献に、いま、限りない感謝の気持ちを込めて、京都大学経済学部同窓会を代表し、お別れの言葉といたします。

106 (106)

第158巻 第1号

浅沼先生どうか安らかに御眠りください。

平成8年4月22日

京都大学経済学部同窓会会長 鳥井道夫